

— 第百参拾号 — (2015年春号)

しん窯青花 春の陶器市 4月28日(火)～5月5日(火)

町内では、第112回有田陶器市に向かって静かに動き出しました。毎年100万人を超えるイベントとして全国的になりました。しん窯青花でも1980年から工房内外を開放して続けてきましたが、すでに36回目を迎えました。秋のミニ市が済んだら即、春の陶器市のお話が出てきます。毎年同じ市の繰り返しですが、お客様も私たちもいつもワクワクドキドキ楽しみなのです。

すでに、今年が目玉は何ですか？いつから始まりますか？と全国津々浦々から問い合わせがあります。HPやフェイスブックで発信する事も増えてきましたが、毎年趣向をかえたDMも届くまでお客様は気にかけて下さいます。



ミュゼグラス

業界紙「陶業時報」4月5日号に、話題の新商品として紹介されました。

有限会社佐賀ダンボール商会様（有田町）と、伝統工芸品の商品開発を行う成田商事株式会社様（東京都新宿区）が、ギフトショーで出会い、有田焼をガラスのフットに封じ込めた「ミュゼグラス」を企画し、販売を開始されました。しん窯では、佐賀ダンボール商会社長石川慶蔵様の依頼を受け、試行錯誤を繰り返しながら、このほど厚さ0.3mmの基盤が完成しました。

しん窯では、来年の有田焼創業400年に向けて、3年前から長野コスタンテ時計工房様と共同開発し、青花ブランドの風合いをイメージして基盤づくりを開始していました。そして4種類で限定100個ずつ合計400個でSPQR arita 時計を発表し、有田焼創業400年を盛り上げよう、と壮大な夢を掲げて進めました。今年、第3弾100個を納入したばかりでした。また、F百貨店様から特別にオリジナルで50個販売したいと要請があり、Fバージョンとして一部リモデルして製作中です。

その延長線上にミュゼグラスの基盤依頼があり、とても喜んでおります。一般的に市場が何を求めているかしっかりとマーケティングをしてから立案企画販売する戦略を習いましたが、私たちが取り組んでいる arita 時計やミュゼグラスは、お客様が何を望んでいるか、いや何を欲しているか、オンリーワンの技術とナンバーワンの心意気で、ワクワクして下さるような感動を心に描いて、ドキドキしながら製作しています。市場を新たに作り出そうというシーズを掘り起こしてみたいという新たなチャレンジなのです。

春の陶器市（4月28日（火）～5月5日（火））で初公開です。



ハマに寄せて

有田駅構内に「旅の記念に自由にお持ち帰り下さい！」とチラシとハマを置いています。1日平均10個位おみやげとして喜んでいただいています。このほど嬉しい便りをいただきましたので、ご紹介致します。

A・F様

豆地蔵の計画に取り組んでおられる由、承って年甲斐もなく胸を膨らませております。実はかなり以前にもあるお寺さんの宝物館に30個ばかり並べた事がありまして、特に若い女性が欲しい欲しいというので、瞬く間に無くなり、これならお守り等の代わりに売れるのではないかと水を向けられました。～以下省略～



K・I様

「吾唯足知」刻んだ陶板

わが家の洗面台の近くに、「吾唯足知」と焼かれた一枚の陶板があります。昨夏九州有田へ旅した時に、窯元でいただいたものです。「吾唯足知」の言葉は京都竜安寺にある蹲踞（つくばい）に刻まれていて有名です。

この陶板は「ハマ」と言われ、焼き物の下に置かれ、いびつな焼き物を決して作らないようにする縁の下の力持ち。ご主人様（焼物）を支えているのだと知りました。「吾唯足知」は、われ／ただ／たるを／する、と読まれます。欲張らず、今の自分を大切に、不平不満を持たず、心豊かな生活をする心です。

新しい年を迎え、「ハマ」を前にして、毎日の生活を振り返ると、たくさん反省させられることがあります。「照る日」「くもる日」もありましょうが、足るを知り、元気で、「今日する用事」「今日行くところ」があって生活できる幸せを噛みしめ、今年一年を過ごしていきましょう。

とっておきの有田焼

約200年続いた窯元の家だけど、完品は殆んど残っていません。窯元のかげ茶碗などと揶揄される事も多く、まずお客様へ上等を、私たち作り手はあとでという商売人らしい思いやりの風習が、今でも残っています。

その中で、明治万博時代に、有田焼が鍋島藩を代表し、日本の芸術品超絶の宝として相当量作られました。1点を選ぶために数百点は焼いたであろうと思われる位同種類の陶片が、黒牟田新登り窯発掘調査の時に大量に出てきました。陶片は何か語りかけてくれそうですが、やはり物悲しいものです。

完品を探すこともあまりない中で、自宅に唯一家宝のような逸品があることに気づきました。それは、染錦唐草牡丹獅子文大皿です。直径42cmもする大皿の中に、唐草牡丹の文様で埋めつくされています。そして、金色・緑色・黄緑色に配色され、目を凝らして少し離れて眺めると、威風堂々とした3匹の獅子が浮かび上がってきます。精巧緻密な描写の中にだまし絵のような遊び心も垣間見られます。絵描き職人さんや当時のデザイナー（意匠作家）の技と心に触れたり、明治の新しい夜明けを背景にした力強い躍動感が1枚の大皿から感じられます。色絵は、香蘭社の職人技です。

香蘭社さんの膨大な資料からその図案画が発見され、この秋、九州陶磁文化館で対比して見られそうです。



色絵唐獅子牡丹唐草文大皿 有田 明治8年(1875) しん窯青花やきもん広場

牡丹唐草の地文の中に、だまし絵の手法で金と黄緑と薄黄緑の体色をした唐獅子を配置している。裏面四方に牡丹文様を描く。高台内に金の上絵の具で銘文「大日本政府陶画試験場陳備／之一納富事務官奉／命製于佐賀縣有田香蘭社／維時明治八年之冬第十一月也」が記されている。納富事務官とは、有田焼の育成に功績のあった納富介次郎(1844~1918)のこと。